

(1998年冬号)こっちの水は甘あいぞ

江戸の昔、いや多分もっと以前から、日本人の旅の心得の鉄則の第一条件は、「旅先で生水は飲むな」だったと思う。日本は山国だから、裾野ではあちこちに泉が湧き、おいしい水がふんだんにあった。現在はしっかりと水道が普及しているからどこで飲んでも“水に当たる”心配なんか無いはずである。

にもかかわらず、相変わらず「旅先の生水は要警戒」とけっこう皆が思っている。

東京や大阪に住んでいる人には申しわけないが、そちらの水道水はおいしくない。なまめくるくてなまぐさい。おなかをこわしそうな気がする。ホテルの部屋の冷蔵庫にビン入りの水が入っていると、ついそっちに手を出してしまう。

国内でもそうだから、外国へ行った時は特に水には神経質になってしまう。蛇口から出る水は飲まずに、エビアンとかミッテルとかビン入りの水を買うことになる。これがけっこう高価なのだ。

チェコのプラハのホテルでは、水の値段がワインの三倍もしていたのには驚かされた。間違いではないのかと思ったが、そうでもない。つまり、ワインは自国産、水は輸入品。だから関税がたっぷりかかって高くなるのだ。同じ伝で、ブルガリア国籍の船の中では、輸入品のスコッチウイスキーが、ブルガリア産ワインの十数倍。同行した人がウイスキーをダブルで頼んだところ、なんと勘定は、日本でジョニ黒一本を買えるくらい取られた。

さて、「本来水はタダ。水をお金で買うなんて」という考えは日本では昔からあったようだ。札幌も同じことだった。札幌に初めて水道がついたのはざっと六十年前の昭和十二年のこと。人口およそ二十万人の頃である。当時北海道にあった市は六つ。そのうち函館・小樽・室蘭・釧路には水道があり、旭川と札幌にだけ水道が無かった。北海道の首都とするには少々気恥ずかしい話だが、何せ札幌は豊平川扇状地の上に築かれた町。地中には伏流水がふんだんに流れており、ポンプを掘りさえすれば水はどこでも汲み出せた。夏はつめたく冷え、冬はなま暖かい井戸水があるというのに、何で水道が必要なのか、なんで金まで払って水を買わなければならないのかと、市議会は大もめにもめたのだそうだ。

いま札幌には五つの浄水場があり最大のものは定山溪ダムから取水する白川浄水場だが、これができたのは戦後のこと。昭和十二年に通水した水道の浄水場とは簾舞ダムから取水している藻岩浄水場をさす。

藻岩浄水場の建設工事には私の祖父がほんのちょっぴり関わりを持っている。祖父は当時ちっぽけな土木請負業を営んでいた。というより、藻岩の中腹で水をつくるという大事業があり、人手を欲しがっているとうわさを耳にし、持ち前の好奇心から仲間をつのってのこのこ出かけて行った、というのが本筋らしい。

その頃はいまのようなパワーショベルなど全くなく、すべて人力で土を掘りモッコでかつぎ出し、馬車で残土を運ぶ人海戦術だった。私自身はまだほんの子供だったから、工事の有様など知りようもなかったが、夕方になると、作業員十人ほどが我が家の庭に戻ってきて、酒か焼酎かをふるまわれて散って行ったのを障子の陰から眺めていた記憶がある。

四年がかりの工事が終わり通水が始まった頃、祖父の請負業は自然消滅したらしく、その後気付くと、祖父は制服制帽姿で毎日出勤するようになり、いつか近所の人から「水道屋さん」と呼ばれるようになっていた。物好きのせいで新潟の旧家の当主の座を勝手におりて北海道にきたくらいだから、当時札幌で最先端の事業だった「水道」が面白くてたまらず、どうコネをつけたのか札幌市水道部にもぐり込んでしまった。その祖父の仕事というのが“検針”。大量に水を使う工場やら店やらを巡回してメーターを調べる仕事だ。確かにこれは当時一番新しい職業だった。伝票の入った革鞆を肩にかけ、片方の先端がフックになり反対側がレンチになっている細い棒を持って意気揚々と出掛けしていた。時には私もお供させられ、新通り市場の魚屋さんについて行ったりした事もあった。

当時一般家庭の水道料は電灯と同じ定額制で一戸五人までが七十五銭、家族が一人増すごとに十銭の追加だった。米一升二十五銭、電車六銭の時代である。

しかし普及は遅々として進まなかった。「金を払って水を買う」ことへの拒否反応が強かったのだ。もともと、私の家にはすぐに水道がついた。祖父がいの一番に申し込んだからに他ならない。栓をひねると水が出る。それも威勢良く泡立って。それが珍しくて、親の叱るスキをみては栓を廻して遊んだものだった。

とはいえ、手押しポンプがなくなったわけではない。水道栓とポンプが二つ仲良く流しに並んでいた。ポンプの頃はその口の下にバケツを置き、汲み置きをしていた。必要な時はひしゃくでバケツから水を取り出した。水道になっても習慣は変わらず、やはりバケツに汲み置きをしていた。

札幌市水道部は市民に「水道のお勧め」というチラシを配っている。“なにとぞ一戸に一栓は生命、財産保全のためにお申込みを願います”といい、料金(例えば五人まで七十五銭のほか、牛馬一か月一頭に付き六厘とかお風呂屋は一石につき六厘)などを紹介し、最後にこう書いている。

「水道の水で洗へば、洗濯物が綺麗になります。殊にご婦人方にお勧め致したい事は、水道の水を使へば、肌を細かにして化粧付がよくなることであります」

地下水を使わずに水道水を使いましょうと、いかにも“こっちの水は甘あいぞ”とホテルの歌をうたっているようだ。

ちなみに、この水道は、現在の市域からいえば、最初の水道とは実は云いがたい。というのは、明治四十二年に、一年九か月の工期で完成した水道があったからだ。それは月寒にあった陸軍第二十五連隊用の水道で、現在の西岡公園(西岡水源池)から下流のろ過装置をへて月寒に通水していた。月寒軍用水道と呼ばれ昭和四十六年に、白川浄水場の通水まで給水を続けていた。